

小説 スーパーマーケット

(上)

安土 敏



講談社
文庫

しょうせつ
小説スーパーマーケット (上)

あづち さとし
安土 敏

© Satoshi Azuchi 1984

1984年2月15日第1刷発行

1992年10月20日第6刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3509

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容
についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。 (庫)



講談社文庫

小説スーパーマーケット (上)

安土 敏

講談社

目次

	プロローグ
第一章	從兄弟同士
第二章	小鳥の餌
第三章	狐狸の里
第四章	達磨
第五章	悪意
第六章	緊急避難
第七章	台風

二六	三〇	二七	二八	三〇	三二	三七
----	----	----	----	----	----	----

小説スーパーマーケット
(上)

プロローグ

朝の九時四十五分に、店内放送のスピーカーから真部店長の声が聞こえた。一階から四階まで、石栄ストア・センター店の全社員が一階のレジスター周辺に集合せよ、と言う。

おや、いつもと違うな。

青果部門主任の大鷹誠造は、トマトの陳列作業を中断して、指定された場所に向かった。

普段、朝礼は、フロア毎に行なう。フロア長が主催し、店長は、日によって、いろいろなフロアの朝礼に参加する。全フロアの社員が集まるというのは、何か特別のことがあるはずである。

すでに集まった社員達の中央に、伊地村寿一常務の巨体が見えた。鼻から上が、人々の頭の上に突き抜けている。その傍に、石狩成二郎専務の顔も見える。真部店長が、スポーツマンらしい身体を機敏に動かしながら、社員達を整理している。

やがて、石狩専務、伊地村常務、真部店長を囲む社員達の輪が出来た。総数百名近くの大世帯である。

「おはようございます」

真部店長が、声量あるバリトンで言った。

「おはようございます」

やや不ぞろいながら、社員達が合唱する。

「今日は、本部から、石狩専務と伊地村常務がお見えになっています。お話をうけたまわりたいと思います」

真部店長は、慣れた調子で、朝礼のはじまりを宣言した。うむと大きくうなずくような仕草をして、石狩専務が一步前に進み出た。

「おはようございます」

石狩専務の、大きくはないがよく通る、少し鼻にかかった声が話し出した。

「皆さんの努力のお蔭で、前期の決算も、順調に終えることができました」

石狩専務は、集まった人々の顔を一わたり見廻した。

「中でも、このセンター店の業績は、まことに素晴らしいものです。今や、この店は、あらゆる意味において、石栄ストアの顔になりつつあります。正直なところ、この大型店への投資は、石栄ストアの運命をかけたものでした。ここにおられる伊地村常務に、今でも笑われるのですが、この店舗を作るとき、社員の運命を預かる最高責任者として、私は、本当に夜も眠れぬ程心配いたしました。しかし、心配は、すべて、杞憂に終わりました。皆さんは、本当によくやってくれました。ここに改めて皆さんの努力に感謝の気持ちを表わしたいと思います。そこで、この成功を礎にして、私共は、積極的拡大策をとることといたしました。具体的には、昭和五十年三十店舗を目標に、毎年計画的に新しい店舗を開設してゆくとういうものです。言い換えれば、これから、毎年平均四、五店舗のペースで出店を続けてゆくことになります」

社員達は、身じろぎもせずに、緊張した面持ちで話に耳を傾けていた。外から見分けられる動作と言えば、精肉部門主任の猿島功治が、専務の話に相槌を打つように、何度も小さくうなずいていることと、衣料フロア長の須貝継之進が注文通りの位置におさまってくれない髪の毛を気にして、時折手を動かしていることぐらいであった。

大鷹は、精肉部門員の多家則夫がどんな顔で、専務の景氣よい話を聞いているのか知りたいと思ったが、位置の関係で見えなかった。昨夜、多家から打明けられた深刻な悩みと石栄ストアのバラ色の未来とがどうつながるのか、大鷹にはよく分からなかった。

「しかも、これらの店舗は、従来のような小型店ばかりではありません。このセンター店のようないや、これよりも更に大型の店舗も開発してゆきたいと思っています。このような積極的拡大策は、言葉で言う程簡単に実現できるわけではありません。全社一丸となった努力と、いつも私が言っている『お客様を大切にすること』がなければ、計画は、かならず挫折するであります。皆さんの一層の尽力を期待してやみません」

青年らしさが残っているような石狩専務の歯切れのよい演説は、最後に思わず拍手したくなるようなピシッとした締め方で終わった。続いて、伊地村常務が、満面に笑みを浮かべて、一歩進み出た。

「やあ、皆さん、おはよう」

「おはようございます」

あまりにも大きな声だったので、全員が誘われるように挨拶の声を出した。

「私は長いこと商売一筋で来たので、難しいことを喋るしゃべのは、どうもニガ手ですが、商売のことだったら、他人ひとに負けない自信があります。商売で大切なことを二つ挙げろと言われたら、私は、一つは頭を下げるくこと、もう一つは利益を忘れないことの二つだと思ひます。これが易しいようで、なかなかできないことです」

伊地村の話は具体的であつた。以前、食品問屋で働いていた頃の経験談が紹介された。

頭を下げ忘れたので、三千万円以上の商売をとり損なつた話と、商売をとることに熱中して後で気がついてみたら利益が全くなかつた話が、面白おかしく語られた。

「ま、要するに頭の使い方一つです。皆さんの商売だつてそうでしょう。それは、たとえば、猿島君に聞いてみたつてすぐに分かる」

突然話の引合いに出された精肉部門主任チーフの猿島は、満更まんざらでもなさそうな顔を幾分緊張させた。脂ぎつた顔の中で両頬がふくれ上がり、見方によつてはコメディアンのような雰囲気も持つてゐる。

「猿島君の売場を注意して見てごらんさい。色が変わりかけたお肉は、たちまちの内にタレ漬けや味噌漬けに変わる。ちよつと古くなつた肉は、放つておけば二束三文だがヒキ肉にして少し味つけをすれば、メンチカツにして、かえつて高く売れる。これが、商売の才覚さいかくというものなんです。これからの石栄ストアの発展を支えるものは、皆さんひとりひとりの商売人としての才覚ださいかくらうと私は思ひます」

大鷹は、もう一度、多家の顔を見たいと思つた。今、伊地村常務に、商売人としての才覚を高

く評価された猿島主任こそ、多家の悩みの原因にはかならないからである。会社の商品を持ち出す常習犯が石栄ストアの商売人の見本なのだろうか。

十五分間の朝礼は終わった。

午前十時丁度に、開店の放送がある。

「毎度石栄ストアに御来店いただきまして有難うございます……」という、カセットテープから流れ出る女性の声である。同時に入口が開かれ、その日一番乗りの客が入って来た。

第一章 從兄弟同士

1

昭和四十四年一月五日、日曜日、昼下がり。

正月三箇日のけだるさの残る沢辺市の駅前通りを、足早に歩いていく一人の男がいた。男は、三十代なかばで、濃いグリーンの背広を着て、片手に革のポストンバッグとコートを下げてゐる。難しい色の背広だったが、長身で色白のこの男は、ごく自然に着こなしていた。

駅前通りは、すぐに、センター街と名付けられた商店街に続いていく。センター街の入口に近い大通りには、目下工事中の市役所ビルがあつたが、男は、その目印を確認してから、センター街とは反対の方角に道を曲つた。

行先は、鉄骨二階建の粗末な建物であつた。

石栄ストア株式会社本部

建物には、似つかわしくない立派な表札が入口に出ている。男は、珍しいものでも見るような表情でその建物と表札を眺めていたが、かすかなほほえみを浮かべると、中に入つて行つた。数段の階段を上り、ガラス戸を開くと、そこには、カウンターがある。男は、カウンターの前に

立って、事務所の中を見渡した。

七、八十坪であろうか。

雑然とした感じのオフィスの中は、事務機の島が散在し、それぞれの島の上に、天井から総務部、経理部などと部名表示が下がっている。男は、興味深げに事務所内の様子を眺めている。

その男の姿に最初に気付いたのは、総務部の岬美子であった。彼女は、石狩専務の秘書と総務部の庶務係とを兼ねているのだが、席が事務所の入口に近いこともあって、事実上、会社全体の受付のような仕事もしている。

「いらっしやいませ」

美子は、笑顔を男に向けた。落着いているが、どこかに華やかさを秘めた笑顔である。

「石狩専務さんにお会いしたいのですが。私は、香嶋と申します」

男は、思いがけず美しい女性が出現したことに、ややとまどいながら、来意を告げた。

「うかがっております。少々、お待ち下さいませ」

美子は、電話で連絡をとった。

「どうぞ」

再び、魅力的な笑顔を香嶋に向けると、美子は案内に立った。

美子が、自席に戻って来るのと、開発部の黒羽素子がやって来るのとは、ほとんど同時であった。

開発部は、新しい出店候補地を取得し、そこに店舗を建設することを仕事としている部だが、暇なのか、上司の管理が甘いのか、素子は、始終、会社の中をウロウロしている。少しでも変わったことがあると、またたく間にやって来る、不思議な嗅覚の持主であつた。

「岬さん、あれ誰？」

「専務の従弟にあたる方のように。大阪の方の銀行にお勤めなんですって」

「ふーん、お正月で遊びに来たのかしら？」

「そうねえ、でも、それだけではないみたい。今朝、専務が『大切なおお客様だよ』って言つてらしたから」

「へえ、大切なおお客様か」

素子は考え込んだ。

「分かったわ、あの人、銀行を辞めて、この会社に来るのよ」

素子の、その言葉を聞いて、美子の胸の中に、小さな暖かい火がともった。何故か、彼女も今そんな気がしていたところだ。

「きっと、そうだわ。よし、これで、ようやく、石栄ストアにも、恰好いい中年紳士が出現するぞ」

素子は、もう、香嶋が転職してくるものと決めてかかっている。

「背が高くて、ハンサムで、素敵だわ」

「そうかしら」

「そうかしらじゃないわ。ダークグリーンンの背広が似合う中年男性なんて、この会社のどこを探してもいないわよ」

「そうねえ」

美子は、お茶汲み場の方へ歩き出した。

「お茶？」

「ええ」

「ゆっくりお茶を出しながら、専務とあの人の話、聞いて来て、教えてちょうだいね」

「でも、黒羽さん、あの方、左手の薬指に指輪してらしたわよ。きっと、すごい愛妻家よ」

「関係ない。関係ない。本当に素敵だったら、そんな指輪、とらせちゃうわ」

「まあ、すごいことを言ってるわね」

美子は笑った。

素子は、もう二十歳代の後半にかかっているが、まだ恋人がいない。快活で、頭もよく、器量もどちらかと言えば可愛い方だが、少々、性格がきついのかも知れない。当世風のなよなよした男性にとつては、扱いかねる存在に見えるのだろう。肉付きのよい長身のために、全体に、いかつい感じがすること、損をしているのかも知れない。

そのことで素子は、やや焦り気味のようなだが、美子には、そんな彼女が、まぶしく思われる。美子にもかつては存在し、今は確実に失われてしまった、未婚の時代を、今、素子は享受している。